幼稚園教育実習の意義と目的についての考察：実習生の保育者観と不安の変化についての調査から

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2016-12-20
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: NAKAYAMA, Misa
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4063

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

幼稚園教育実習の意義と目的についての考察

―実習生の保育者観と不安の変化についての調査から―

児童学部 児童学科
中山 美佐　Misa NAKAYAMA

要旨：本学では児童学部児童学科において所定の科目を履修し単位を取得することにより幼稚園教諭１種免許を取得することが可能である。学生が幼稚園教育実習に行く前にどのような保育者観を持っているのか、実習を経験することでその保育者観は変化するのか、また、幼稚園教育実習を経験し幼稚園教諭となることについて不安に感じたことを調査することで学生自身にとって必要な実習後の大学での学びについて考察する。幼稚園教育実習事前、事後指導においてワークシートの記入とアンケートの記入を行い、その結果を分析する。また、ワークシートとアンケートの結果を通して実習前に不安に感じた事柄を実習という実践から学び自信に繋ぐことができるのか、あるいはその事柄をはっきりさせることにより今後さらに学んでいくべきことが明確にすることができるのかといった問題を考察する。

キーワード：幼稚園教育実習、保育者観、幼稚園実習事前指導、幼稚園実習事後指導、不安

はじめに

保育者として生きていこうと決めたとき、或いは決めようとするとき自分はどんな保育者になりたいのか、どのように子ども達を育てていきたいのかという自分の保育者観があるであろう。それは自分が今まで経験してきた出来事や周りの環境が大きく関わっていると思われる。また自分を育ててくれた保育者、教師、両親など学生により様々でありその影響を受けた大きさも様々であると考えられる。また育ててもらってきたという立場から育てるという立場に変わる時、視点や考え方も大きく変化するであろう。今まで経験してきた実習先で子どもを育てる立場である保育者からも様々な保育者観を学び取ったと思われる。学生たちは様々な経験、学びの中からなりたい保育者像をはっきりと見出すことによりこれからの学びをさらに深めることができると推察される。保育者像について、梅田優子（2012）は「居心地のよさは、その子にとっての園生活が快適であるということでもある。もちろん毎日の生活の中では、その子どもにとって快適ではないと感じることも起こる。たとえば、友達と気持ちのすれ違いが起こって悲しい思いをしたり、自分の力ではどうにもならず悔しい思いをすることもあるだろう。これらは、子どもが育っていく過程で大切な体験である。ただ、そうしてゆらいでいる自分を見守ってくれたり、寄り添ってくれたりしてくれる保育者の存在があることによって日々いろいろなことはあるけれど、園での生活が全体として心地よいものとなっていくのではないだろうか。自分のありのままが受け入れられていることを子どもが感じていくこができるような保育者の温かいありようが大切である」[1]と述べている。このように保育者として欠かせない「保育者の温かいありよう」という資質が必要であると考察される。それらのことを踏まえ幼稚園教育実習事前、事後指導を通して目指す保育者になるために何を学ぶ必要があるのかどのように学びを深めていけばいいのかを学生自身が気付いていけるように導いていく必要があると考える。また保育者という仕事の難しさ、深さを再確認したうえで未来を担う子ども達と関わる仕事の素晴らしさ、楽しさ、面白さ等にも気付けるように導く必要があると考える。

１．　問題と目的

学生たちは「今の自分」をどのようにとらえているのか、保育者として生きていくために今自分に足りないものは何か、あるいは習得し身につけたいものはあるのか、そして保育者として生きていく覚悟があるのか、4週間という長い実習期間で何を学んでくるのか、「なりたい自分」を具体的に見つけることができているのか等を明確にしなければ、ただ時間だけを過ごす

実習になってしまう恐れがある。先ず「自分を知る」こと、そして今後「なりたい保育者像」をはっきり持つことが実習前に確認すべき大切なことだと考える。まだ今の自分がわからない、あるいはどんな保育者になればいいのか見つけられない学生も少なくない。その問題から「なりたい保育者」を思い描き実習を迎えるにあたって何を実習で学んでくるかということを具体的に見つけ出すことが幼稚園実習事前指導の目的であり、実習後、さらに実習という実践から学んだことを踏まえて「これからの自分」を見つめ大学で再度学ぶ事柄を明確にし「目指す保育者」に近づくことができるよう導くことが幼稚園実習事後指導の大きな目的のひとつであると考える。

２、研究方法について

2016 年幼稚園教育実習事前指導からワークシートとディスカッションを交えた授業を行いその結果から「なりたい保育者像」を探り、そのために実習で何を身につけたいかを具体的に見出すように導いた。またその結果から実習で何を学びたいかを学生たちに問いかけることにより実習で何を学ぶことが必要なのかを明確にしていくことを目指した。また、実習後の事後指導では、アンケートを通して実習での学びについてたずねた。なお、ワークとアンケート内容を以下に示す。

＜ワークの内容について＞

「幼稚園教育実習事前指導ワークシート」より

・ワーク１　あなたがこれまでに出会った「こうなりたい先生」もしくは「こうなりたくない先生」　について思い出し、どのような先生だったか具体的に記入してください。

・ワーク２　今回の実習で身につけたい力について記入してください。

・ワーク３　その力を身につけるためには、実習先でどのような努力が必要ですか？またどのような観察が必要だと思いますか？

＜アンケートの内容について＞

1、なりたい保育者（なりたくない保育者）について実習前と後で変化はあったか。再度なりたい保育者を記入。

2、今後、保育者になるために取り組まなければと考えたこと。

3、実習に行く前に不安に感じたこと。

4、実習を終えて不安は解消（軽減）できましたか？

5、その理由はなんだと思いますか？

この内容でワークとアンケートを行い、99 名の学生から得た結果より考察を深めていくこととする。

3、結果と考察

3－1　ワーク１の結果と考察

学生がこれまでに出会った保育者、教師の中から「こんな先生になりたい」「こんな先生にはなりたくない」という内容を見ると「こんな先生になりたい」という内容を記入した学生は 90 名と圧倒的に多かった。逆に「こんな先生にはなりたくない」と回答した学生は 9 名であった。学生の多くは今まで出会った先生からの影響を受けていると考えられ、中にはその先生と出会ったから自分も先生になりたいと思ったと回答している学生もいる。以下に学生ワークの「なりたい先生」「なりたくない先生」を抜粋で示す。

学生 A「私が今までに出会ったこうなりたい先生は幼稚園に通っていたときに先生が何かあれば『どうしたの？』と優しく声をかけてくれた先生です。私が将来子ども達と関わる職業に就きたいというきっかけにさせるほどとても優しい先生でした。私はその先生を見て私も先生のように明るく優しい先生になりたいなと思いました。」

学生 B「私がこうなりたいと感じた先生は実習先でお世話になった先生です。その先生は子ども達に対する接し方が丁寧でいつも明るい笑顔の先生でした。もちろん保護者の方の対応も丁寧でそんな姿を見て私もこのような先生になりたいと思うようになりました。反省会の時にお話を聞かせていただくと、子どもと製作をしたり劇をしたりすることが好きとおっしゃっていて本当に子どものことが大好きでこの仕事に誇りを持っているのだと伝わってきました。」

学生 C「小学校の時にいつも大きな竹の定規を机にバンバン打ちつけて力を見せつけて、子ども達に言うことを聞かせるような先生がいました。その先生は生徒から恐れられていましたが慕われていませんでした。先生というより暴力や力の差を見せつけるような人になりたくないと思いました。」

「なりたい先生」の内容として殆どの学生が先生の明るさ、優しさ、寄り添う気持ちなどをあげており次

に言葉かけ、叱る時はきちんと叱り褒めるときはしっかり褒める等けじめがある、一緒に遊んでくれる等を挙げている。目指す保育者についてワークの結果から学生たちは保育者として必要なものは知識や技量ではなく資質であると考えていることがわかる。逆に言えばどんなに知識や技量があったとしても保育者としての資質に欠けていれば子どもの成長に良い関わりを持つことはかなり難しく、子ども達の心に残りその後の人生にまで良いと思われる影響を及ぼすことは少ないであろうと考察する。また、「なりたくない先生」とあげられていた内容としてはいつも怒っている、笑わない、子どもの気持ちを理解しようとしないとあり、ここでも資質が大きく問われていると考察する。

阿部和子（2012）は「担うべき保育は、子どもの最善の利益を最優先的に保証する営みである。ゆえに保育者は一義的には、まず人間性が問われる。」[2]と述べている。保育者としてよりもまず、人として子ども達の前に立てるかどうかであると考える。「なりたくない先生」にあげられていたようにいつも怒っている、笑顔がない保育者であれば子どもでなくても周りにいる大人にもいい影響は与えられないであろう。

しかし、保育者として資質だけあればいいのであろうか。気持ちをくみ取ることができる、いつも笑顔でいられる、優しいだけでは子どもの「生きる力」を育むことは難しいと考える。阿部和子（2012）はプロになる視点として「常に、子どもと共に生きる自分という存在がどういう人間なのか、保育を生きる人間として、専門職としての人間形成が問われることになる。子どものニーズに応える知識、技術などを、共に生きるプロセスの中で学び取ることによって、共に生きる上で必要な、あるいは豊かにするための知識・技術も一緒に磨かれているといえる。従って、よりよい実践を目指すというとき、その実践のプロセスは豊かな学びの場を提供しているといえる。保育者は知識・技術の習得以上に、実際に子どもと共に生きるというそのことの学びをプロセスの中で体験しているといえる。」[3]と述べている。子どもと共に生きる中から、保育者は学び知識・技術を高めていかなければならない。それはまったく何の技術も知識もないところからではなく、大学で学ぶ知識・技術が根底になければならないと考える。基本的な知識・技術がなければその場を生きる子どもに合わせて知識・技術をより向上させることは難しいであろう。また、子どもと共に生きる覚悟を決めその上でよりよい関わりを持っていくために知識・技術を向上させようと努力できることが保育者として大切なそして欠かせないもうひとつの資質といえよう。

3－2　ワーク 2 の結果と考察

回答の多い順から下記の結果であった。

① 子ども全体を見る力、臨機応変に動ける力、クラのスをまとめる力等　53 名
② ひとり一人への対応、個々の違いを知る、寄り添う力　30 名
③ 保育時術（ピアノの弾き歌い、手遊び、絵本を読む等）の向上　13 名
④ その他　3 名

4 回生最後の実習であり設定保育や全日実習を行うであろうと考えられることや、保育所での実習経験からクラス全体を見ていく難しさを学んだこと、また今後の就職を踏まえてクラス全体を見てまとめていく力を身に付けたいという学生が多くまた、何かあった時や思いもよらないことが起こった時の対処法も学んでおきたいと考えていることがわかる。次に資質の面でさらに一人ひとりと関わり寄り添う力を身に付けたいという学生が多い。また、子どもの個々の違いを知りたいというように子どもの発達や個性を見て適切に指導や援助をしたいと考えていることがわかる。次いでピアノなどの具体的な保育技術の向上を身につけたいと考えている学生も多い。園によっては毎日ピアノを学生が弾いたり 1 日に何冊も絵本の読み聞かせをしたり、いろいろな種類の手遊びをしたりとほぼ実践中心の園もあり、多くの学生が保育技術についても実習で具体的に頑張ろうと前向きにとらえ保育者として様々な面で技術も身につけなければならないと考えていることがわかる。しっかり今の自分と照らし合わせ自分を振り返ってよく考えられていると考察する。また寄り添う力をあげている学生もいる。事前練習ではなかなか習得できるものではないが多くの子ども達と真剣に接することで少しずつでも習得できるのではと推察する。また、学生たちは決して知識・技術だけでは補えない資質につても学ぶべきことと考えていると考察する。

3－3　ワーク 3 の結果と考察

回答の多い順から下記のとおりである。

① 先生や子ども達をよく見て指導の様子を学ぶ、声

掛けなどの方法を観察する等。　68 名

② ひとり一人の子どもをよく観察する、丁寧に接する等。　14 名

③ ピアノの練習、手遊び、絵本の読み聞かせ等の練習をする。　17 名

実習では先生の声かけや指導方法を具体的に学んでいきたい、また個々の子どもによっての声掛けの仕方などを観察したいという内容のものが多く実習で先生の指導方法などを身につけたいと考えていることがわかる。次に目立たない子どもやおとなしい子ども、なかなかそばに来ない子どもにも積極的に関わっていこうと子どもとの個々の関わりを前向きに考えていることがわかる。ピアノについては実習生から多く聞く苦労するという内容である。特に大学入学とともにピアノを弾き始めた学生はどうしてもかなりの努力が必要とされる。実習園側から「少し弾けたらいいです。」と言われてもその少しが実習園と学生の間に温度差があることも多く、実習日誌とピアノの練習に追われ寝る時間がないと聞くこともあり実習前に少しでも練習しておきたいと回答する学生も少なくない。

この実習事前授業でワークすることにより、個々の学生が自分の「目指す保育者」及び「そのために何をするか」を再確認、あるいは初めて確認できたのではないかと推察される。そして実習までにしなければならない準備についても確認できたと思われる。ワーク 1～3 を通して自分のなりたい保育者像を見つけ出し考えをまとめ明確にしたうえで次にそのために実習で何を学ぶのかを考えることができたと考察する。そのうえで実習中にすべき事柄をしっかり見出せたと思われる。しかし、それが認識できたことによって実習に対する期待と不安が増したとも言えるであろう。学生の中には実習に対して期待よりも不安を感じる者も多い。今までの実習で失敗したことや強く指導されたこと、知識や技術の足りなさ等不安なことを挙げればたくさんあると推察される。玉置哲淳(2013)は「不安があるのが問題ではなく、その不安と向き合い、実習体験を通してよりよい実践を学び・自分を高めていこうという意欲や意識を持つことが大切である。むしろ、不安のない学生は傲慢になってしまったり問題意識の欠如が指摘されたりすることが多いといえる。何の不安もないという人の方が心配である。この意味で、いろいろ不安を持っていることの方が当然なのである。」[4] と述べている。「なりたい保育者」に向かって学びを進めるとき多くの不安に苛まれる学生も多いが、この不安材料を見つけられたときこそ自分を変えていけるカギを握ったと言えるであろう。

次に実習を終えて学生たちは自分の「目指す保育者観」は変化したのか、あるいは保育者観をしっかり持つことができたのか、また目指す保育者になるため今後自分が何を学ぶのかが見えてきたのかをアンケート結果より考察する。

アンケート回答 93 名の学生から得た結果より考察を深めていくこととする。

3-4　アンケート 1 の結果と考察(回答数 93 名)

回答の多い順から以下のとおりである。

① 実習前と大きく変化はなかった。なりたい保育者は子ども一人ひとりに寄り添う。子どもの個性を伸ばすことができる。保護者にも子どもにも信頼される。明るい、優しい保育者等。56 名。

② 実習前と大きく変化はなかったがなりたい保育者像が少し変化した。子ども主体に遊べるように環境を整えられる。子どもにさまざまな体験を提供できる。全体と個々をしっかり見ることができる。自分にゆとりがある保育者等。21 名。

③ 変化があった。より明確に実際に個々の場面で対処できるようになりたいと思った。1 か月の実習で自信がついた。子どもの気持ちをもっとくみとりたいと思った。優しい保育者になりたいとより強く思った。子どもだけではなく先生同士の中でも優しい保育者になりたくなった等。12 名。

④ 不安になった。保育者にはなりたくないと思った。ピリピリしている保育者にはなりたくないと思った。自分は保育者にはならない等。4 名。

以下にアンケート内容を抜粋して示す。

学生 A「実習前と変わったことはあまりありません。子どものことを一番に考えて小さな変化にも気が付ける保育者になりたいと思います。」

学生 B「1 か月間という長い実習で気持ちが変わったらどうしようかと思っていましたが、1 か月間関わることで自信に繋がり子ども達の気持ちを汲み取ることができる保育者になりたいと思いました。」

学生 C「より明確に『こうできたらいいな』という目標ができた。子ども同士のトラブルへの対応や日々の保育室のなかでの対応等。配慮が自然にでき

るようになりたい。」
学生 D「なれるかどうか不安になりました。」

このアンケート結果から実習前と後で大きな変化は見られずやはり保育者としての資質を重要に考えていることがわかる。優しい、暖かい、明るい保育者を目指す保育者、なりたい保育者と挙げている。しかしその内容はもっと具体的に、また向上させて考えており子ども一人ひとりに寄り添う、全体を見る、保護者と信頼関係を結ぶ等 1 か月の実習を経験したからこそ気付けた内容であると考察する。また、実習に行く前と後で変化があったとしている学生の多くは幼稚園教諭の仕事内容をしっかり観察してきている。子どもとの関わりの場面指導や先生同士の関わり方、チームで働くということ、保護者対応等。また、さらに先生になりたいと思いが強くなったというものもあった。これらの内容からは今まで育てて来てもらった保育者へのあこがれや目標から、自分が子ども達を育てる保育者になるという視点で見ることができるようになっており明確に自分の「なりたい保育者」について考えることができたと考察される。また、目指す保育者の資質を根底に置きながら更に保育者として必要であると思うことを学ぶことができたと考察する。しかし、④に挙げているように先生にはなりたくない、不安であると答えた学生もおり、実習での経験が今後の学生の進路に大きく影響を及ぼすことがわかる結果となっている。実習経験をしたからこそ果たして自分が保育者となっていけるのかと考えた学生もいたと推察される。実習前には今まで出会った先生からなりたい保育者観を抱いていた学生が実習で学ぶことによって「自分が保育者になる」という目線で様々な経験をすることにより自分には難しいと認識したのではないだろうか。岡本富朗（2014）は「実習を含めた大学での学びは、何のためにあるのかということである。たしかに保育者になるために専門知識を学び、ピアノや歌などの多くの技術を学び、そして体験する、それは言うまでもなく保育者になるための学びである。しかし、これらの学びや学生生活のなかで大切なことは、職業人になるための学びを通して、『自分が変わる』ということだと思う。人間として自分が『変容していく』ことだと思う。何度も言うようだが、実習中さまざまなことで、おどろいたり、感動したり、泣いたり、喜んだりする。新しい多くの発見もあったことだろう。なかには自分で自分に気づかなかった『自己発見』もあったことと思う。」[5]と述べている。学生たちは大学での学びと実践をすりあわせた中から自分の進むべき道、あるいは自分がどんな保育者になりたいかを具体的に考えることができたのだと考察する。そして「変わらなければならない自分」「このまま大切にしていきたい自分」を発見したのではないだろうか。なかには「自分は保育者に向いていない。」とはっきり思った、あるいは「違う道を考えていたが保育者になろうと思った。」と決意した学生もいる。それは実習が「自己発見」となるきっかけとなったのではないかと考察する。

3-5 アンケート 2 の結果と考察
回答の多い順から以下の通りである。

① ピアノの練習、手遊びのレパートリーを増やす、設定保育の内容を多く持つ等、保育技術に関する内容。58 名。
② 子どもの発達段階や障害についての学び、緊急時の対応の仕方、保護者対応の仕方、子どもの気持ちの理解への学び等。26 名。
③ もっと多くの経験を積む。現場に出る等。4 名。
④ その他、未回答。5 名

このアンケート結果より多くの学生は実際に自分が保育者として現場で必要とするものを多くあげている。特にピアノの練習について必要と答えている学生が多い。実際に子ども達の前でピアノの弾き歌いをしたり歌唱指導を行う場面もあり、緊張の中でなかなかうまくできなかったといった経験を通してより強く感じた学生も多いであろう。幼稚園では 1 日を過ごす中でピアノの音で始まりピアノの音で終わる園が多くピアノが苦手としている学生はどうしても必要だと感じたと思われる。設定保育は実習園で 1 度は経験したと思われるが、思うようにいかなかったりいくつもの設定案が浮かばなかったりして悩んだ学生も少なくない。また、設定案は考えられたが思うように指導できなかったこともあったと思われる。具体的な設定保育内容をいくつも持っておくことは現場に出たときに役立つと考えたと推察する。また、②については大学に戻って再度学んでおきたい内容であったと思われる。実際に子どもの姿を通して見てみると子どもの発達や障がいについて自分の理解が甘かったと思う場面もあったであろう。特に障がいについては様々であり（その障がいにより声のかけ方、タイミング、援助の仕方等）もっと学んでおかなければ対応できないと考えたと思われる。また、設定案を考える際、子どもの年齢差や月

齢差、個々の発達についての学びが足りないと感じた学生も少なくなかったと推察される。③については 1 か月の実習を経験することによってもっと実際を見ておきたい経験しておきたいと考えたと思われる。それは保育者の姿や指導の様子などをよく学んだからこそ自分が今後保育者になる前に多くの現場を経験し子どもの前に立ち指導する機会を得ておきたいと考えたのではないかと思われる。このように実習での経験の内容は再び大学での学びにつながっていくと考察する。④については就職活動をすると述べた学生と未回答の学生であった。ここでの回答で再度学ばなければならないという内容が考え付かなかったということは実習で自己を省みるあるいは発見することができなかったともいえるであろう。少数の学生ではあるが実習事前指導が活かせなかったともいえるかもしれない。自己課題について手良村昭子(2013)は「実習は幼稚園教諭としての到達度評価を行うものではなく、自己評価を通して将来への成長の糧を得ることが大切である。そのため、できたことを確認して自己肯定感や意欲を高めるとともに、できなかったことを謙虚に振り返り、自身で次の自己課題を探ることが大切である。」[6]と述べている。このようにできなかったことへの確認が大切でありそれに向けて学ぶ姿勢が大切だと考えられる。また 1 ヶ月の実習を通してできないと思うと感じた学生の中には自己肯定感がもてなかったという見方もできると考察する。このような場合にはより事後指導を注意深く行う必要があると考える。場合によってはその学生の経験をより深く考察し指導することも大切なことであろう。

3－6 アンケート 3 の結果と考察

回答の多い順から以下の通りである。

① 園の雰囲気や方針、担当の先生との相性や人間関係。31 名。
② 実習日誌や部分実習、全日実習ができるかどうか。21 名。
③ 体力について。体調を崩さず 1 か月実習をやりきれるかどうか。16 名。
④ 子どもとのかかわり方、声かけや、様々な子どもの対応の仕方。14 名。
⑤ ピアノは弾けるかどうか。8 名。
⑥ 心配はない。3 名。

アンケート結果より園の方針や先生との相性を心配する学生が多くそれまでに経験した実習経験から心配にいたる学生も少なくないことがわかる。②であげられている内容については実習事前指導のあり方が問われていると考えられしっかり指導しなければ学生の理解や自信に繋ぐことができないと考察する。また、この内容について学生がしっかり習得できたかどうかを事後指導で確認しなければならないと考える。③についても今までの実習経験で不安になったと思われる。④については今まで乳児としか関わっていない学生や、今までの実習経験でうまくいかなかった経験から不安に感じていると思われる。②から⑤についてここで具体的にあげていくことにより何が自分に足りないか何を学ぶかを確認することができたと考えられる。しかし①に関しては実際に始まらないとわからないことも多い。コルトハーヘン（2010）は安心と挑戦のバランスについて「経験を学びの出発点とするには、その実習生が経験する内容の中にある程度の挑戦がなければなりません。挑戦を盛る込むためには、実習生がすでにできることと要求されていることとの間に距離を作り出すような課題を出すことが必要です。しかし、その距離があまりにも遠い場合、それは脅威となり、学びは妨げられてしまいます。このバランスを保つためには実習生に求められる学習のプロセスを慎重に実現していくことと、教師教育者の側も対人関係のスキルを身につけていることが求められます」[7]と述べている。このように実習生を受け入れる保育者も実習生の資質や学生自身が学び取って自分のものにしていることを見極め、さらに実習で学びとってほしいことを考えながら指導に当たることが大切と思われる。学生を見てどのように課題を出していくかどのように指導していくかを考える必要があるであろう。その中で安心と挑戦のバランスを考えることも必要とされる。現場の保育者によってはそれを負担と感じることもあると推察する。しかし、実習生が来ることにより新しい発想を持った学生たちから影響を受けたり学びになることも少なくないと思われる。園児たちも実習生が来ることで楽しいと感じることもあるであろう。ほとんどの保育者が実習生に多くのことを学びとってほしいと願って指導していると思われる。しかし、残念ながら学生にうまく伝わらなかったり誤解されることもあるかもしれない。できればそれらの問題で実習が上手くいかなかった等のようなことがないようにまた、次の保育者を育てるという大きな意義を理解し担っていってほしいと願う。

3-7　アンケート 4 の結果と考察

① 不安はなくなった、軽減した。83 名。
② 不安である。6 名。
③ その他。（課題と考える。わからない、無回答）4 名。

回答からはほとんどの学生がさまざまな不安を抱えて実習に臨んだがその結果として不安材料はなくなった、或いは少なくとも軽減はできたと答えている。実際にやってみて「できた。」と感じた学生が多かったと考えられる。反面、まだ不安である、あるいはわからないと答えている学生もおり何らかの形で満足いかなかった点やより不安になったことがあると考察される。

3-8　アンケート 5 の結果と考察

① 先生が優しかった、きちんと指導してくれた、友達に助けられた等、人間関係が良かった等。40 名。
② 子どもがかわいかった、癒された、子どもと積極的にかかわって子ども達とたくさん話せた等。24 名。
③ 自分自身が頑張って学んだ、ピアノをいっぱい練習して弾けるようになった、日誌や指導案、部分実習もできるようになった、自分の努力等。13 名。
④ 期間が長かったから慣れた、無事に終わったから等。6 名。
⑤ 園の理念が合わなかった、先生が怖かった、もっとピアノを練習しなければと思った、体調を崩した等。無回答等。10 名。

一番多かったのは先生がきちんと指導してくれた、優しかったと挙げており不安材料として担当先生のことを心配していた学生がここで解消されたのだと考察される。また本当に子どもが好きと思われる回答や頑張ってしっかり学んだとの回答があり様々な経験から自信に繋がったのではないかと思われる。慣れた、無事に終わったという内容のものは個々の学生の積み重ねた努力が感じられる。⑤についてはアンケート 4 で不安である、わからない等と答えた学生たちである。ピアノについては練習を重ねたが自分の努力がまだ足りないと感じており実習園のピアノのレベルが必要以上に高かったのかどうかまでははっきりと読み取ることは難しい。体調の不安もどれくらいの睡眠時間がとれたのか緊張がどれくらい続いたか等個々の学生にも違いがあると考えられる。ただ、無回答の学生以外ははっきりした不安内容を述べている。はっきり自分が何について不安と感じているかがわかったことも実習の一つの学びであったと言えるであろう。

3、総合考察

幼稚園教育実習の意義と目的は様々な捉え方があると考える。今回の研究目的は実習事前、事後指導、および実習そのものを通して学生自身が「どんな保育者になりたいのか」またそれについて今後「どのように学びを深めていくのか」をはっきりさせそれに向かってさらに進むことができるかどうかである。その意味では多くの学生が実習事前ワークおよび実習後のアンケート結果から見て学生自身が自分で考え今後の自分を見通すことに繋がったと考察する。どれだけ多くの事に気付けるか、様々な出来事をどれだけ自分に置き換えて考えられるかが今後の学生の学びに大きな差が出ると考察する。また、今後の自分の進むべき道が分からなくなった学生には今後丁寧な指導が必要と考える。その学生にとって実習の意議と目的があったのかと言えば「違う自分を発見した。」「この道ではないかもしれないと分かった。」という結果を伴う意義や目的があったと考察する。今後の課題として学生たちが目指す保育者像をさらに具体的に思い浮かべられるような指導が望まれるであろう。しかし資質という面で考えるとき「自分の資質」についてどれだけ理解できているのか自分自身でわかりにくいところもあると思われる。他者から見て自分はどのように映っているのか、どのように理解されているのか、自分自身を振り返ったときと同じであるのか。そして、資質は変化するのか、するとすればどんな努力や工夫が必要なのか、資質について考えるときその指導はどのようにしていくのか。今後学生を指導していく上で大きな課題であると考察する。また、なかなか自分に肯定感が持てない学生もおりその部分にも着目していく必要があると考察する。

おわりに

実習から帰ってきた学生たちは心なしかひとまわり成長したように感じられる。実習前は「心配。」「不安。」「行きたくない。」などと話す学生もおり、また実習中は「設定保育、どうしましょう。」「実習ノートの訂正が多いです。」等、様々な問題を挙げていたが終わってみれば「楽しかった。」「すごく勉強になった。」「幼稚園で働くことに決めた。」と明るく話してくれる学生も

多くいる。学生たちは実習という大きな経験をし、また学び乗り越えることによって大きく成長したと思われる。実習事後指導では一人ひとり前に出て実習先の園の概要や自分のした設定保育の内容を話す時間を持つことにより自分の実習を振り返り、他の学生の実習内容を聞きくことから再度、自分の学びについて考えることができたと推察する。コルトハーヘン（2010）は「学びのプロセスは大抵難しく苦しいものですが、それを省察することによって目的が達成されたこと、もしくは目標に確実に近付いたことをはっきりと実感することができます。省察はまた、実習生たちに、それを自分でやってきたのだという事実に気付かせることができるでしょう。このような分析を通して生まれる肯定的な感情は、その実習生の学びに対する姿勢をも変化させます。これは知識を獲得することよりもはるかに重要なことです。」[8]と述べている。学んだことを発表する学生達を見ることにより筆者自身もともに感動したり反省点が見つかったりする。それは指導を行った筆者にも大きく影響を及ぼし再び学びを深めていかなければと決意させるものである。学生たちが保育者として必要と思っている「資質」については筆者自身にもあてはまるものと考察し今後の指導につなげていかなければと考える。

【注】

1、阿部和子他「子どもの生活環境を整えるということ」『保育者論』萌文書林 2012 年、88 頁。

2、同書、「保育者とは」16 頁。

3、同書、「保育者とは」22 頁。

4、玉置哲淳・島田ミチコ監修「序章第 1 節実習は保育を夢から目標に変える体験」『幼稚園教育実習』建帛社 2013 年、2 頁。

5、阿部明子編著「第 8 章学んだことのその後の学生生活への生かし方」『教育・保育実習総論－実習の事前・事後指導』萌文書林 2014 年、260 頁。

6、前掲「第 6 章実習のしめくくり・反省と評価」『幼稚園教育実習』148 頁。

7、Ｆ・コルトハーヘン編著『教師教育学－理論と実践をつなぐリアリックステイック・アプローチー』2010 年、72 頁。

8、同書 147 頁。